

前橋文学館報

前橋文学館報 第44号

2018



萩原朔太郎賞受賞詩人より

第六回 清水哲男（第二回受賞者）

俳句とフィクション

たまに下手な俳句をつくる。詩のように緊張して書くことはないから、精神をリラックスさせるためには、いささかの役に立つ。

そして、ごくたまにその下手な句を発表することがある。それはそれで構わないものの、困るのは、どういうわけか俳句に詠んだことは、みな「事実」を詠んだものと思われてしまうことだ。詩の世界では起きつけないことが、俳句の世界では起きてしまう。

つまりはるかなる子規や虚子の影響なのだろうか、俳句では事実詠が珍重され、フィクションは敬遠される傾向が強いのである。

だから、病気でもないのに、たまさか過去のそれを書いて出してしまうと、「たいへんですねえ」と見舞い状をいただいたりしてあわてふためくことになったりしてしまう。けれどもまさか、俳句の一つひとつに「この作品はフィクションです」などと断り書きをつけるわけにもいかず、どうしたものかと変な悩み

を抱えているうちに、思いついたのが次の連作だ。これならば、誰が読んでもフィクションとしか考えられないだろう。

林不忘のフィクションに出てくる「丹下左膳」を前面に据えたのである。

春雷や 十句

春雷や丹下左膳の馬を曳く

春雷や馬上に喘ぐ落し差し

春雷や隻手が払う虫の羽

春雷や昼飯時のシルエツト

春雷や牛追唄とすれちがう

春雷やしばし就きけり赤き犬

春雷や酒樽転ぶ町抜ける

春雷や街道沿いに立つ埃

春雷や挫折のごとき水の渦

春雷や笑わぬ左膳ふるさとに

下手さ加減はお許しただくとして、俳句はここま
でやらないと、フィクションとして通用しないのは、
何とかならないものだろうか。

余談になるが、あるとき林不忘はうっかりして、丹
下左膳に「双手」を突かせてしまったことがあるそう
だ。読者からは抗議の声が殺到したという。

そこで一句浮かんだ。

春雷や左膳双手を突きにけり

そして、この句だけは右の連作には加えられない。
「フィクションではない」からである。

清水哲男(しみず てつお)

1938年東京都生まれ。

京都大学文学部在学中に同人雑誌「ノッポとチビ」に参加。詩集『喝采』を出す。1974年に出した『水瓶座の水』によってH氏賞を受賞。『スピーチ・バルーン』『東京』などの詩集のほか、評論、エッセーなど著書が多い。

1979年からFMのモーニング番組を担当。1994年、詩集『夕陽に赤い帆』によって第二回萩原朔太郎賞を受賞。1997年から2006年まで萩原朔太郎賞選考委員。